

# 理科だより

発行

平成21年9月20日

編集 RIKADA ISUKIMAN

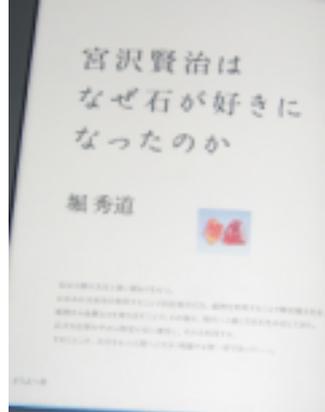
約 $6.3 \times 10^{11}$  [J]

## 宮沢賢治はなぜ石が好きになったのか

宮沢賢治の小説には、石の話が良く出てきます。昔からそう思っていました。例えば宮沢賢治の小説を引用すると……

引用「気のいい火山弾」  
「ある死火山のすそ野のかしわの木のかげに、「ベゴ」というあだ名の大きな黒い石が、永いことじいっと座(すわ)っていました。「ベゴ」と云(い)う名は、その辺の草の中にあちこち散らばった、稜(かど)のあるあまり大きくない黒い石どもが、つけたのでした。ほかに、立派な、本とうの名前もあったのですが、「ベゴ」石もそれを知りませんでした。ベゴ石は、稜がなく、丁度卵の両はじを、少しひらたくのぼしたような形でした。そして、ななめに二本の石の帯のようなものが、からだを巻いてありました。非常に、たちがよくて、一ぺんも怒(おこ)ったことがないのでした。それですから、深い霧(きり)がこめて、空も山も向うの野原もなんにも見えず退くつな日は、稜のある石どもは、みんな、ベゴ石をからかって遊びました。中略  
「さあ、大切な標本だ

から、こわさないようにして呉(く)れ給(たま)え。よく包んで呉れ給え。苔(こけ)なんかむしってしまおう。」苔は、むしられて泣きました。火山弾はからだを、ていねいに、きれいな藁(わら)や、むしろに包まれながら、云いました。「みなさん。ながながお世話でした。苔さん。さよなら。さっきの歌を、あとで一ぺんでも、うたって下さい。私の行くところは、このように明るい楽しいところではありません。けれども、私共は、みんな、自分でできることをしなければなりません。さよなら。みなさん。」「東京帝国大学校地質学教室行、」と書いた大きな札(ふだ)がつけられました。そして、みんなは、「よしよ。よしよ。」と云いながら包みを、荷馬車へのせました。「さあ、よし、行こう。」馬はプルルルと鼻を一つ鳴らして、青い青い向うの野原の方へ、歩き出しました。」最近、「宮沢賢治はなぜ石が好きになったのか：堀秀道著 ISBN4-88622-4 ¥2200E」という本を見つけました。その本によると賢治は岩手の学校で地質学を学び、鉱物や宝石に精通したことが分かりました。なるほど、石の



話題が多いわけです。詳しく覚えていないのですが、他の小説にも石同士が会話をして「具合が悪いのです、今から数万年前……」といった内容のものであったように思います。今度ゆっくり探してみたいと思います。自分自身の田舎が東北なのでふと思ったのですが、祖父も石を集めていました。「桂化木(けいかぼく)」という木の化石を見せてくれたのを覚えています。東北地方は鉱山が多く、山で生活していた人が多かったので石に対する思い入れのある人が多いのかも知れません。東北のある田舎の小さな公民館でもかなりたくさんさんの鉱物が飾ってあります。

## 宇宙と岩石

宇宙空間の恒星(水素の核融合反応で自ら輝いている星)水素原子核1gがヘリウム原子核に変わると、そのエネルギーは

のエネルギーが発生します。水素と水素が強烈な重力と熱エネルギーでくっついてヘリウムという元素になります。太陽よりもずっと重い恒星では、次にヘリウム同士が核融合をはじめ、炭素や酸素が形成されると言われています。要するに、宇宙空間には一番構造の簡単な水素が多かったのが、核融合によってくっついていき、原子核が大きくなり、いろいろな元素ができていくわけです。電子数=陽子数で、陽子と中性子が原子核を構成しています。これらの原子核はものすごいエネルギーで結合しているので、人間の力では容易に切り離すことができません。「金=Au」ができるには「一兆度」という温度が必要だそうです。唯一ウラン235と、ウラン235から生じるプルトニウムの原子核に中性子を当てると原子核を切り離すことができますが、そのエネルギーのすごさは周知の通りです。どこか遠い宇宙で、太陽よりもずっとずっと大きい恒星や、ビックバンなどさまざまな爆発時に出来た元素が、宇宙空間に飛び散り、それらが岩石に入っているのです。石から広大な宇宙を連想させるのにはこういった事情があるからかも知れません。「天空の城ラピュタ」のストーリーの一節を思い出しました。